

# 赤十字NEWS

September 2012 Vol.868

http://www.jrc.or.jp



日本赤十字社

赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



## 日朝赤十字が意見交換 問題解決へ人道的立場で尽力

戦時中や終戦直後の混乱の中で北朝鮮地域において亡くなった日本人の遺骨問題について、日本赤十字社と朝鮮赤十字会が8月9、10日、北京市内で意見を交換。「高齢になった遺族の方々のために、ぜひ日本への遺骨帰還と墓参を実現させたい」。こうした赤十字の人道的精神に基づいて、この問題を解決しようとする日朝両赤十字の強い思いは、日朝政府間協議という対話の場へと結実しました。日本と北朝鮮の赤十字間による話し合いは、2002年の北朝鮮在住日本人配偶者故郷訪問支援事業のための日朝赤十字連絡協議会会談以来10年ぶり。(8面に関連記事)

写真:左側手前が朝鮮赤 李虎林事務総長、右側手前が日赤 田坂治国際部長

### CONTENTS

#### TOPICS

2 献血運動推進全国大会が一巡  
皇太子殿下がお言葉  
平成25年度  
看護専門学校・助産師学校  
入試日程

#### TOPICS

3 山形県青少年赤十字(JRC)  
高校生カンボジア訪問  
東日本大震災  
子ども記者が被災地取材

#### SPECIAL

4 5 東日本大震災復興支援  
これからも被災者一人ひとりに  
寄り添い続けます

#### AREA NEWS

6 7 三重・宮城・岐阜・沖縄・香川・  
愛知・鹿児島・島根  
スポーツとコラボ  
「昭憲皇太后と赤十字展」開催中  
Information  
プレゼント

#### WORLD

8 日本人遺骨問題  
日朝赤十字が意見交換  
核戦争防止国際医師会議  
核兵器なき世界を目指して  
【新連載】ドクター中出のカロンゴ日記

### クローズアップ



読売巨人軍  
ちょうのひさよし  
長野久義選手

#### 存在感あふれる赤十字支援リーダー3代目

好調な打線のリードオフマンとして、チームをけん引する長野久義選手。今年は読売巨人軍の赤十字支援リーダーとして、グラウンド外での存在感も高めています。

支援リーダーは、阿部慎之助選手、坂本勇人選手に続き3代目。児童養護施設などに通う子どもたちを、年間10試合に設けられた「赤十字招待ボックス」に招待するなど、元気を届ける活動を行っています。

東日本大震災の復興支援についても、昨年からの引き続き強い関心を持って、「被災された方のために、

少しでも役に立ちたい」と話します。「赤十字チャリティーグッズ」として長野選手がデザインしたトートバッグの「Go forward together To the future together (共に前へ、共に未来へ)」というメッセージにも、「復興に向け、共に歩んでいきましょう」という思いが込められています。

「被災者の皆さんを元気づけられるような全力プレーで、勝利に貢献したい」と、優勝と復興支援に貢献することを誓いました。

#### PROFILE

1984年生まれ。日本大学、社会人野球チームのHondaを経て、2009年にドラフトで巨人軍から1位指名され入団。1年目の2010年は打率.288、本塁打19本をマークし最優秀新人賞を獲得。2011年には、首位打者、ベストナイン、ゴールデングラブ賞も受賞した。走・攻・守の3拍子がそろった外野手として、さらなる活躍が期待されている。



# 輝いていた「勉強がしたい」の思い 山形県JRC高校生メンバーが カンボジア訪問 学用品寄贈や 交流事業を实践

「いつか学校の先生になりたい」「医者を目指して一生懸命頑張ります」——目を輝かせて将来の夢を語るカンボジアの小学生。山形県高等学校青少年赤十字(JRC)は、そんな子どもたちへ学用品を贈る教育支援事業(国際交流)に取り組んでいます。代表の高校生5人が8月8日から13日までカンボジアを訪問。小学生に学用品を届けました。



子どもたちが心待ちにしていたJRCメンバーの到着。「僕が案内するよ!」と大はりきり

高校生が訪問したのは、世界遺産のアンコールワットを抱える地方都市シエムリアップにあるフン・セン・ジャン小学校。ホテルからバスでの移動でしたが、道が細くバスは途中までしか入れません。バスを降りて歩くこと10分、迎えに来てくれた子どもたちの姿が遠くに見えてきました。



授業まで待ちきれず、プレゼントされた色鉛筆でさっそく塗り絵。上手に描けたかな?

「会った瞬間に抱きついてきてくれて、手をつないで学校まで案内してくれました。胸が熱くなりました。言葉は通じないんですけど、こういう交流もあるんですね」と廣田瑠花さん(山形東高校2年生)。

「買った瞬間に抱きついてきてくれて、手をつないで学校まで案内してくれました。胸が熱くなりました。言葉は通じないんですけど、こういう交流もあるんですね」と廣田瑠花さん(山形東高校2年生)。

「みんな目がキラキラしていて、素直で一生懸命。そんな姿を人に見せるのは、日本だとちょっと恥ずかしいし、かっこ悪かったりする。でも、みんなの「勉強したい」という純粋な気持ちは、そういう忘れていたこと(一生懸命の大切さ)を思い出させてくれました」

「家の手伝いや仕事もあるけど、勉強して、将来は学校の先生になりたい。勉強は歴史が得意。今持っているバッグがポロポロだから、新しいリュックサックがプレゼントの中で一番うれしかった」

15歳のロイ・ラくんもそんな一人。家の事情で入学が遅れ、まだ小学4年生です。でも、勉強への意欲は負けていません。

**解説**  
**カンボジア教育支援事業**

「地方に住むカンボジアの子どもたちの多くが貧困状態にある」という山形県赤十字有功会の視察報告を受け、平成21年11月からスタート。JRCが掲げる「国際理解・親善」を实践するため、県内のJRCメンバーをカンボジアへ派遣し、国際性豊かな青少年を育成するのが目的です。具体的な活動としては、県内33校(特別支援学校高等部を含む)のJRC加盟高校の呼びかけにより、書き損じ葉書を回収。その収益で、学用品セットの購入・贈呈を行います。贈呈のためのカンボジア訪問は平成22年度に続いて今回が2回目。



石巻市の伝統工芸である硯の材料産地、雄勝町で硯組合事務局長の千葉さんにインタビュー

**解説**  
**子ども新聞プロジェクト**

「子ども新聞プロジェクト」は、日本赤十字社愛知県支部と朝日新聞社の主催。小学生自身が被災地取材し、それを基に作成した新聞を授業に活用していくことで、震災の記憶を未来に伝えていこうという狙いです。「ぼくと同じ小学生がどうしているのかを知りたい。ぼくが見たり聞いたりしたことを日本中の子どもたちみんなに知ってもらいたい」(鈴木信吾くん)、「みんなの心が一つになれるように全力をつくしたい」(門田嘉奈美さん)、と熱い思いを胸に、6人の児童は、災害医療や復興、がれき処理など石巻市内を取材しました。2枚の壁新聞を作成したほか、9月にはタブロイド判の「子ども新聞」(12ページ・発行部数約28万部)も発行。愛知県内のJRC加盟校の4~6年生全児童に配付される予定です。

**友達は助け合いの存在**

取材に参加したのは、愛知県内の青少年赤十字(JRC)加盟小学校から「子ども新聞プロジェクト」の記者として選ばれた児童6人です。

石巻赤十字病院では、被災者救護の先頭に立った石井正医師にインタビュー。日頃の人間関係が災害時に思いがけない助けになったとの話に、

子どもたちは人とのつながりの大切さを実感しました。犬山市立東小の田尻陸くんは「石井先生が強調していたのは『友達が多ければ多いほどお得だ』ということ。友達は助け合いの存在」と友達の存在をあらためて考えるきっかけになったようです。

津波で全校児童108人のうち死者・行方不明者74人という惨事に見舞われた大川小学校にも取材しました。

**東日本大震災**

**青少年赤十字の子ども記者が被災地取材**

**自分たちの目で見た「あきらめない強さ」**

「今僕たちができることは何なのかを、現地で聞いてみたい」「あらためて地震の恐ろしさ、被災地の様子などを知ってもらいたい」——そうした思いを胸に、愛知県内の小学6年生6人が「子ども新聞」記者として東日本大震災の被災地である宮城県石巻市を訪問(7月21~23日)。そこでの取材内容を2枚の壁新聞にまとめました。



愛知へ戻った後、1日ばかりで制作した壁新聞

他人事とは思えない

提起しました。

# 被災者に聞いた義援金調査

## 大半が「ありがたかった」と回答 配分時期や公平性についての意見も

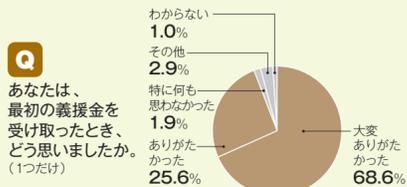
東日本大震災の発生以来、たくさんの方からお寄せいただいた義援金は、現在も順次、全額現金で被災者の方々へお届けしています(事務費については、日ごろから日赤を支援くださる方々からの社資(会費や寄付金など)により対応しています)。

義援金を受け取られた方々を対象にしたアンケート調査を今春実施し、結果がまとまりました。被災者の方々の意識と実感を把握し、義援金のあり方を検討するうえで参考とします。

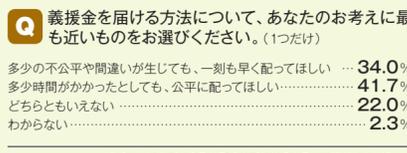
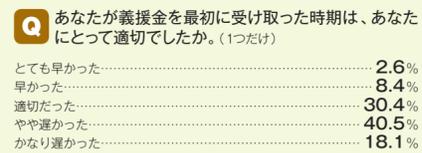
義援金の受付・送金状況 (8月22日現在) ※送金額は、日本赤十字社と中央共同募金の両団体合わせての金額になります。より詳細な情報は、ホームページをご覧ください。  
 受付 282万9747件  
 3201億4624万8020円  
 送金 3557億8319万9566円  
<http://www.jrc.or.jp>

◆調査概要  
 調査対象: 自治体から義援金を受け取った被災者  
 対象者の属性: 被災3県に居住する20～50代の男女  
 調査人数: 309人(宮城県232人、福島県61人、岩手県16人)  
 調査期間: 平成24年2月17～18日  
 調査機関: 株式会社電通パブリックリレーションズ  
 調査方法: インターネット調査

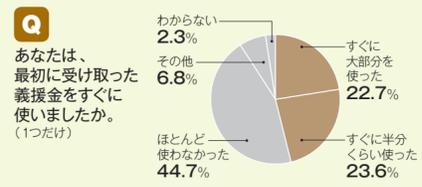
1 約95%の被災者が感謝 義援金を受け取ったときの感想  
 東日本大震災では支払い窓口となる自治体も被災したことで、当初はその配分に滞りが発生しましたが、義援金を受け取ったときは9割以上の方が感謝の意を表明しています。



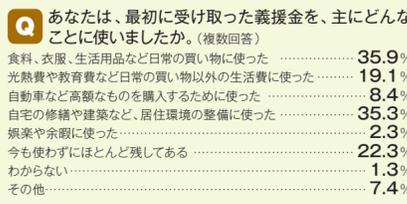
2 迅速性と公平性、双方の追求が課題に 義援金配分の時期や方法



3 生活費や住宅修繕などに「すぐに使った」が約半数 義援金の使途



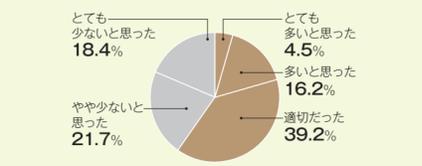
義援金を「すぐに使った」世帯と「ほとんど使わなかった」世帯はほぼ二分されており、これは、住宅の被害の有無や程度の違いがあっても同様。「すぐに使った」内容は、日常生活費や家屋の修繕費が多い。



4 「多い」か「少ない」か意見がわかれた 義援金額 義援金額への評価

義援金の金額についての質問では、「適切だった」「(とても)多いと思った」が合わせて約6割となった一方、「少ない」と感じた人も全体の約4割に。

Q あなたは、最初に受け取った義援金の額について、どう思いますか。(1つだけ)



5 「日赤は全額義援金を届けている」知らない人が4人に3人

日赤など義援金受け付け団体は、手数料を一切取らずに、義援金全額を自治体に送金していますが、その事実を知っているかどうかを聞いたところ、「知らなかった」の回答が7割強。特に20代の被災者は8割以上が「知らなかった」と回答しています。

Q 義援金を受け付けている日本赤十字社などの受付団体では、被災した自治体に、手数料をとらず全額を送っています。あなたはご存じでしたか。(1つだけ)



# 東日本大震災復興支援 震災から1年半

# これからも被災者一人ひとりに寄り添い続けます



震災から1年半が経過しましたが、「先のことが本当にわからない」(福島県在住・40代女性)と、不安を抱えながら過ごす日々はなお続いており、復興にはまだ長い時間が必要です。日本赤十字社は、被災者一人ひとりに寄り添って復興支援を継続中です。

震災直後から緊急救護に当たるとともに、仮設住宅での生活に必要な「生活家電セット」を13万世帯に届けました。集会場への備品整備、高齢者への介護用ベッドの寄贈など支援メニューを順次拡大し、さらに、こころのケアや子どもの遊び場の提供など、きめ細かな支援を展開しています。

※復興支援事業は、世界の赤十字社などから寄せられた海外救援金(約979億円)を財源に実施しています。

## 子どもたちに元気と笑顔を

### 教育支援

被災地の子どもたちを北海道ルスツ高原に招待した「サマーキャンプ2012 in クロスヴィレッジ」や、福島県で展開中の室内プレイランド「すまいるパーク in FUKUSHIMA」などで、子どもたちがのびのびと過ごす時間を提供。仮設住宅で暮らす子どもたちにスクールバスの寄贈、学校への保健室備品や体育備品の整備、仮設体育館の建設なども進めてきました。



サマーキャンプ2012 in クロスヴィレッジ



## いのちと健康の守り手として

### 保健・医療支援

住民のいのちと健康を維持していくうえで不可欠な医療の復興。仮設診療所(南三陸町)や仮設夜間急患センター(石巻市)建設などの事業が完了し、今後は公立志津川病院の再建など地域に根ざした取り組みをしていく予定です。放射線の不安が続く福島では、食品放射能測定器の提供や、県内の病院内にホールボディカウンター(被ばく量測定器)を整備。



### クウェート政府から401億円 三陸鉄道の復旧などに活用

クウェート政府からは、昨年10月に500万バレルの原油、今年7月に200万ドルの寄付金が寄せられました。原油代金相当額(約401億円)は日赤を通じて、岩手、宮城、福島の被災3県に配分されています。この財源を利用して、岩手県では三陸鉄道の復旧に取り組むほか、各県では被災した農林水産業の復興や医療・福祉・介護への支援などを実施しています。また、中小企業の設備や地域商業店の店舗の復旧費用の助成も行い、被災地の方々の生活基盤の再建にも活用します。

### 若さとパワーに期待大 県内2団目の学生奉仕団



活動の継続を期待して、委員長は1年生の中から選出されました

**岐阜県**  
2012.7.18

大学生による赤十字奉仕団としては、県内2団目となる岐阜経済大学学生赤十字奉仕団が結成されました。

同大学で行われた炊き出し訓練に、大垣市の地域赤十字奉仕団が参加したことがきっかけで、大学内のボランティアサークルのメンバーを中心に18人で結成。委員長の木村良洋さんは「支援を必要とする人たちにさらに大きな『ありがとう』と『笑顔』の輪を広げていきたい」と決意を述べました。

同奉仕団は、AEDや緊急時の対処法を学んだ後、秋には大学近隣の小学生などを対象に防災学習を開催したり、大学祭でのHIV/エイズ予防啓発活動に取り組むほか、大学内に献血バスを迎え、献血を呼びかける活動を行う予定です。

### 子どもたちが主役の復興支援 被災地で開催

**三重県/宮城県**  
2012.7~8

「募金などのボランティア活動はしてきたけど、こうして直接的な活動ができて本当にうれしい」——三重県津市の青少年赤十字(JRC)中学生メンバー31人が被災地の石巻市を訪問。中学生同士の交流会では、「津市みんなに、生の声を伝えたいと思った。1年以上たないとういう気持ちにはなれなかった。前を向いて伝えていきたい」(石巻市千葉友貴さん)、「ここで得た大切な体験を、三重県に持ち帰り、私たちができることは何かをしっかりと考えたい」(津市三浪かな子さん)など力強い意見が交わされました。

交流会翌日は、大橋団地仮設住宅で除草ボランティア活動を行い、同自治会会長の山崎信哉さんが「地元の各学校に帰ったら『津波は鉄のようにかたく、いのちを持っていくぞ』って伝えてほしい。津波の知識を持つことがいのちを守り、財産となる」と話すと、真剣な面持ちでメモをとる生徒もいました。



除草ボランティアでは30袋分も草むしり!「震災の話を聞いて、誰かのために少しでも役に立ちたい気持ちでいっぱいです」(写真中央 鶏飼隆平くん)



「また参加したい!」と子どもたちの笑顔が印象的だった「わんぱく元気スクール」

東日本大震災で被災した子どもたちに元気を取り戻してもらいたいと、仮設住宅などで生活する宮城県内の小学生を対象に自然体験教室「わんぱく・元気スクール」(7月22~24日/国立花山青少年自然の家)が開催されました。

小学生たちを束ねるリーダー役として地元のJRC高校生メンバーが活躍。「はじめは口をきいてくれない子どもがいて大変だったけど、冒険ゲームなどをしていくうちに打ち解けてくれた。最後には手紙ももらってとても感動した」と語り、小学生、高校生、お互いにとって忘れられない3日間となりました。

### お母さんも高校生も町内会も いのちを守る講習会を各地で開催

**愛知県/岐阜県/鹿児島県**

「海賊みたいでかっこいいよ〜」と声をかけながら、ストッキングを包帯代わりにして頭のけがの手当を練習するお母さん。愛知県支部の向かいにある柳城幼稚園で7月12日、保護者を対象にした幼児安全法の講習会が実施されました。家庭内で起こりやすい子どもの事故やその予防について学んだ後、身近なものを使った応急手当を体験。母親同士で練習し合ったり、子どもを練習台に何度もチャレンジする参加者の姿が目立ちました。



子どもを対象にした講習は、若いママたちに好評です



1人より2人、2人より大勢で運べば安全だということを実感

岐阜県支部では、青少年赤十字(JRC)加盟校の岐阜県立大垣桜高等学校福祉科の1、2年生を対象に7月19日、防災訓練を実施。講師として派遣された赤十字救急法指導員と支部職員が、非常用包装食(ハイゼックス)の炊き出し訓練や救急法(搬送法、包帯法など)の実技を指導しました。

「地域みんなと力を合わせる事が大切だと感じた」「日頃の訓練が必要」——7月31日に鹿児島県赤十字会館で開かれた「赤十字防災教室」では参加者から地域で助け合う防災活動への意欲が聞かれました。同教室は、鹿児島市の町内会役員など地域のリーダーを対象に初めて開催されたもので、80人が参加。非常持ち出し品や避難時のポイント、非常食炊き出しの方法、毛布を使ったけが人の搬送などを体験しました。



毛布を用いた搬送では「テレビでは見ていたが実際やると難しい」との感想も

### 患者さんの願い 天まで届け!

**沖縄県**  
2012.7.26

患者さんやご家族に安らぎのひとときを届けようと、7月4日、沖縄赤十字病院(那覇市)で「七夕コンサート」を開催。同病院ではこうした手づくりコンサートを15年前から続けており、医師や看護師らが心のこもった演奏と合唱を披露。コンサート会場である病院ロビーに置かれた笹の葉には「早く歩けますように」など患者さんやご家族の願いが書かれた231枚の短冊がつるされました。

地元の青少年赤十字がこの短冊を受け継ぎ、リーダーシップ研修で行うキャンプファイヤーの燃え上がる火とともに、天に届けました。参加した喜友名美月さん(高校1年生)は「短冊がキャンプファイヤーの火と一緒に輝いて、みんなの願いがかなっていくような気がしました」と語りました。



病院とJRCが連携し、総勢180人が参加する大きなイベントになりました

### 目指せブラックジャック 中学生が外科医体験

**香川県**  
2012.7.21

医師を目指している中学生、高校生に医師の仕事の魅力を肌で感じてもらうと、高松赤十字病院は外科系体験型セミナーを開催。県内の中高生42人が参加しました。

参加した生徒は、ガウン、マスクなどの手術衣を着け、手術室を見学。鶏肉を実際の部位に見立てた手術体験では、外科医師からメスや鉗子などの器具の使い方、手術用の針や糸での縫合方法を教わった後、鶏肉を電気メスで切開し、縫合を行いました。若手の医師や研修医との交流会では、「医師として心がけていることは?」「どんな時にやりがいを感じますか?」など活発な質問が。セミナー後には「医師になろうと思う気持ちがさらに強くなりました」と力強い感想も出されました。



外科のほか、内科、災害医療のセミナーも実施。来年度も開催予定です

### 「昭憲皇太后と赤十字展」日赤本社1階で開催中

昭憲皇太后基金の創設100周年を記念した「昭憲皇太后と赤十字展」が日本赤十字社本社(東京都港区芝大門1-1-3)1階で開催中です。世界の人道支援活動に活用される昭憲皇太后基金への寄付も募集しています(展覧会、募金ともに来年4月11日<昭憲皇太后ご命日>まで)。



明治神宮文化館で開催(3月26日~5月28日)された際には、天皇皇后陛下をはじめ各皇族方もご覧になられ、来場者は2万8000人を数えるなど好評を博しました。本展では、昭憲皇太后のお人柄と赤十字との関連を理解できる資料を抜粋して展示しています。是非お立ち寄りください。

- 観覧料: 無料
- 開館時間: 午前9時~午後5時(休館日/土・日・祝・年末年始)
- お問い合わせ先: 企画広報室 ☎03-3437-7070

### 県内企業主催で集団献血 関連会社含め114人が協力

島根県 2012.7.29

7月の「愛の血液助け合い運動月間」のイベント最後を締めくくる集団献血が7月29日、株式会社藤原技研工業(島根県松江市)の主催により松江市竹矢公民館で開催されました。



主催した藤原技研工業の皆さん

同社では、毎年血液が不足する冬と夏に集団献血を企画しており、今回で6回目。毎回、社長の藤原陽吉さん自らが率先して自社社員や関連会社などへ広く呼びかけています。当日は、猛暑にもかかわらず、献血バス2台が到着するのを待ちかねたように、開始時刻の8時半過ぎから続々と献血申込者が来場。一日で、献血申込者114人(うち400ml献血者102人)と多くの方にご協力いただきました。

## Information

### ローソンのレジモニターで救急法講習PR

全国に1万店舗以上を展開するコンビニエンスストア「ローソン」のレジモニターで、日本赤十字社の救急法講習が紹介されています。お客様向けに新商品の宣伝などと一緒ランダムに表示されます。機会があれば、是非チェックしてください。



防災週間に合わせて9月9日まで流れる予定です

### コープ共済連とのタイアップ事業でキッズデザイン賞受賞

日本赤十字社と日本コープ共済生活協同組合連合会が共同で展開する「子どもの命と健康を地域で守るワークショップ」が第6回キッズデザイン賞を受賞。同賞は、子どもの安全や健やかな成長に貢献すると認められる製品やサービスなどを顕彰するものです。



受賞により、この「キッズデザインマーク」を用いた広報ができ、注目が高まります

### 京都府南部豪雨災害の義援金募集

宇治市など京都府南部を襲った8月中旬の大雨により被災された方々への義援金にご協力をお願いします。

名称=平成24年8月京都府南部豪雨災害義援金

受付期間=平成24年9月28日(金)まで

受付口座=郵便振替口座 00950-3-1258

加入者名=日赤京都府支部 京都府南部豪雨災害義援金

- ※受領証の発行を希望される場合は、その旨を通信欄にご記入ください。
- ※窓口での取扱の場合、振替手数料は免除されます。
- ※銀行口座でも義援金を受け付けております。詳しくは京都府支部までお問い合わせください。

日本赤十字社京都府支部 組織振興課 TEL 075-541-9326

## プレゼント

読売巨人軍・長野久義選手×日本赤十字社のチャリティートートバッグ&ワイブストラップセット(サイン入り)を3名様にプレゼントします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールにてご応募ください。



長野選手がデザインしたトートバッグ

- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS 9月号を手にした場所(例/献血ルーム)
- ⑥赤十字NEWS へのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

応募先 ●郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 企画広報室 赤十字NEWS 9月号プレゼント係 FAX/03-3432-5507 メール/koho@jrc.or.jp(件名「赤十字NEWS 9月号プレゼント係」)

応募締切 ●9月24日(月)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

## スポーツとコラボ

### 読売巨人軍が「赤十字応援デー」

東京都 2012.8.11



けんけつちゃんファミリーも、チームマスコットのジャビットたちと一緒にパフォーマンスで大活躍



「やったー長野だ!」。長野選手の写りがデザインされた赤十字応援ステッカーをもらったちびっ子ファンから歓声が上がります。中には、お小遣いを募金箱に入れてくれる子ども

も——8月11日に東京ドームで行われた巨人対ヤクルト戦は「赤十字応援デー」。場内アナウンスでは「日本赤十字社は現在も東日本大震災の被災地で復興支援を続けています」のメッセージが流されるなど、グラウンドの内外でファンに向けた赤十字のPRが行われました。

応援デーは、巨人軍の「赤十字支援プロジェクト」の一環です。東京都支部のボランティアや職員68人が参加して、ステッカー配付や活動資金の募金、チャリティートートバッグの販売などを実施。東日本大震災の救護活動の紹介も行われました。また、「赤十字招待ボックス」には児童養護施設の子どもたちが招待され、熱戦を間近で観戦しドキドキの時間を過ごしました。

### リンク栃木ブレックスが救急法講座

栃木県 2012.8.1

日本バスケットボールリーグ(JBL)所属のプロバスケットボールチーム「リンク栃木ブレックス」が社会貢献活動「ブレックス・スマイル・アクション」の一つとして、救急法の普及に取り組んでいます。



栃木県支部では今後もチームと協力し、救急法講習会を企画していく予定です

選手を対象にした7月の救急法講習会に続いて、8月1日にはファンや子どもたちを集めた「選手と学ぼう救急法」を開催。参加者からは「選手と一緒に学べて楽しかった」「救急法の大切さが分かった」などの声が聞かれました。

### AKB48

#### メールマガジンの登録受付中!

日本赤十字社のメールマガジンでは、日赤のさまざまな活動や都道府県支部ごとのイベント案内、お役立ち情報などをお届けします。また、オフィシャルメッセージャーであるAKB48の特設サイトでは、スペシャルコンテンツを随時更新。メルマガ登録がまだお済みでない方は、ぜひご登録ください。今すぐ www.jrc-akb48.jp



facebook に日赤公式ページができました。東日本大震災での取り組みをはじめ、とっさの手当や献血のこと、国内外の活動現場の写真など赤十字ならではの最新情報を発信していますので、ぜひご覧ください! http://www.facebook.com/japaneseredcross



日本人遺骨問題

# 日朝赤十字が意見交換 帰還・墓参の実現へ継続的協議

日本赤十字社は8月9、10日、第2次世界大戦末期や終戦直後の混乱の中で北朝鮮地域において死亡した日本人の遺骨帰還や遺族による墓参の実現について、朝鮮赤十字会(北朝鮮の赤十字社)と北京で意見交換を行い、両国政府の関与を得ながら協議を進めることで合意しました。これを受けて政府間協議が行われます。

## 人道的な見地に立って意見を交わす

日赤は田坂治国際部長、朝鮮赤十字会は李虎林事務総長を代表に、双方からそれぞれ3人が出席し、人道的な見地



握手を交わす(左)日赤 田坂治国際部長と(右)朝鮮赤李虎林事務総長

に立って真摯な意見交換を行いました。

この中で朝鮮赤側は、日本人の遺骨の数や埋葬場所について説明。日赤が日本人遺族の墓参実現を求めたことに対し、朝鮮赤側は「遺族でも日赤でもいつでも歓迎する」と応じました。

問題の解決には政府の関与が欠かせないことから、両社はそれぞれの政府に協力を要請することで一致。今後も継続的に協議していくことに合意しました。

田坂部長は協議終了後、記者団に「朝鮮赤側にも問題を解決しなければいけないという姿勢が見られました。意見交換は成功裏に終わりました」と語りました。

## 2万柱以上の遺骨が未帰還

厚生労働省によると、現在の北朝鮮地域では3万4600人が死亡し、2万1600柱の遺骨が残っていると推計されています。

今年に入って、北朝鮮政府関係者による日本人遺骨問題についての言及や、日本のメディアによる現地取材などに鑑み、日赤が人道的立場から朝鮮赤に書簡を送り、今回の意見交換の場が実現しました。

核戦争防止国際医師会議

# 核兵器なき世界を目指して

医療関係者の立場で核戦争防止に取り組む核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の世界大会が8月24～26日に広島県で開催され、日本赤十字社の近衛忠輝社長が国際赤十字・赤新月社連盟会長として出席しました。

## 福島原子力災害も主要テーマに

自らも大きな被害を負った広島赤十字病院が被爆者救護に奔走するなど、赤十字と核兵器との関わりは、広島に原爆が投下されたその瞬間に始まりました。昨年11月の国際赤十字代表者会議では、無差別兵器の核兵器使用は国際人道法の定める理念に反することなどを決議しています。

来賓あいさつした近衛会長は、今回の大会の議題に福島での原子力災害が取り上げられたことに歓迎の意を表明。その上で、核兵器による被害と原子力災害には共通部分が多く、医学的に共通の取り組みが必要であると述べました。



核兵器廃絶と原子力災害対策の分野で連携を強めたいと述べた近衛会長

新連載 第1回

## ドクター中出の! カロンゴ日記



中出 雅治 (外科医)

1959年生まれ。大阪赤十字病院 国際医療支援部長。専門は呼吸器外科、災害・戦傷外科。インドネシア、パキスタン、ハイチ、イラク、ネパールなどで活動。ウガンダには、計5回、延べ14カ月滞在。

ウガンダ共和国北部の深刻な医療人材不足の改善を目指して、医療支援、研修医の育成を行う「ウガンダ北部地区病院支援事業」。2010年4月から、ウガンダのアンボロソリ医師記念病院(北部アガゴ県カロンゴ郡にあるので通称「カロンゴ病院」)に、日本各地の赤十字病院から医師を派遣しています。今月号から4回にわたり、中出医師が現地の様子を紹介します。



手術中の停電は日常的。自家発電への切り替えは手動なので待たされることも……

## 外科医はオールラウンダー

「ウガンダ全体で外科医は何人くらいいるん?」「8つの県立病院に24人と国立病院に10人くらい。合わせても50人はおらんわ。日本は?」「1万人以上おるけど、専門化が進んで、狭い範囲の患者しか診れへん医者がほとんど」「ウガンダでは、それは通用せえへん。自分も帝王切開もやってたし、開頭もしてた……」

ウガンダのベテラン整形外科医とのある日の雑談です。もちろん大阪弁ではありませんでしたが、この会話に先進国と途上国の医療の違いが集約されているように思います。われわれが普段日本の病院で行っている医療は決して「世界標準」ではありません。

## アフリカの一般内科医、恐るべし!

カロンゴ病院に、僕が最初に派遣されたのは2010年4月。以来延べ13人の医師が派遣されてきましたが、その任務は患者の治療(手術数は週20～25件! 日本のい

わゆる大病院と同数レベル)と研修医の育成です。

2年前の最初の赴任時も、到着翌日から手術が待ち構えていました。産後20日目の女性は腹痛と発熱を訴え、下腹部からは膿。日本ならエコーやCTの検査をオーダーするところですが、当然何もありません。触診だけで開腹するかどうかの判断を迫られました。結局開腹すると子宮破裂の状態。電気メスなし、時々暗くなる照明の下での手術というハードなスタートとなりました。しかしこの日もっとも驚いたのは、隣の手術室で一般内科医のペイシエント副院長が子宮破裂した別の妊婦の緊急帝王切開の手術を1人でやってのけていたこと! アフリカの一般内科医、恐るべし!

## 病状を悪化させるのは……

日赤による医師派遣が始まってから今年6月までの2年3カ月の間、カロンゴ病院での外科手術件数は約2200件。大阪日赤

(外科医15～16人)の外科の手術数に近い件数を、日赤派遣医師と2人の研修医のわずか3人でやっています。

手術でもっとも多いのは、膿瘍の手術です。こちらではだして歩いていることや衛生状態が悪いことなどが理由で、皮下や筋膜下に膿瘍をつくる人がとにかく多く、それも相当ひどくなってから病院に来るので、骨髓炎にまで進行し、骨まで削らなければならない場合もあります。

これが日本なら、「なぜもっと早く病院に連れてこないのか」と言いたいところですが、ここでは、お金がない、移動手段がない、連れていく人がいない、そもそも病院がはるか遠くにしかない、などさまざまな理由で、取り返しのつかない手遅れを招くことが避けられない。病院に行く前に地域や部族の風習による伝統的治療を受けてさらに悪化させていることもしばしばです。

## 医療の原点がここにある

外科疾患では外傷も多くて、大人の場合にはバイクによる交通事故や暴力事件がほと

んどです。子どもの場合はマンゴーの木から落ちて骨折、というのが多く、「Mango tree fracture(マンゴーの木骨折)」と勝手に呼んでいます。そのほか、ヘルニアから四肢切断、耳に虫が入って出てこない、鼻にボタンやトウモロコシの粒を詰めて取れなくなったとかいうのも、ぜ～んぶ外科で診ています。ついには歯科まで診ることも。

日本では自分の専門以外の患者を診ることが許されなくなってきつつあり、そのために、医師はいても専門外なので救急搬送を断る、という事態が起こります。ここでは、運ばれてきた患者が何であろうか自分が診なければ死んでしまうという状況に追い込まれることがある。限られた設備で、あらゆる科の疾患を相手に、自分の力不足を感じることもしょっちゅうですが、「自分のできることしかできん」という割り切りもどこかで必要です。

3年間で恐らく3000件を超える手術を行い、20人前後の研修医を育てるこの事業。“Do my VERY BEST each and every day in Kalongo”です。